山岳遭難の現場から

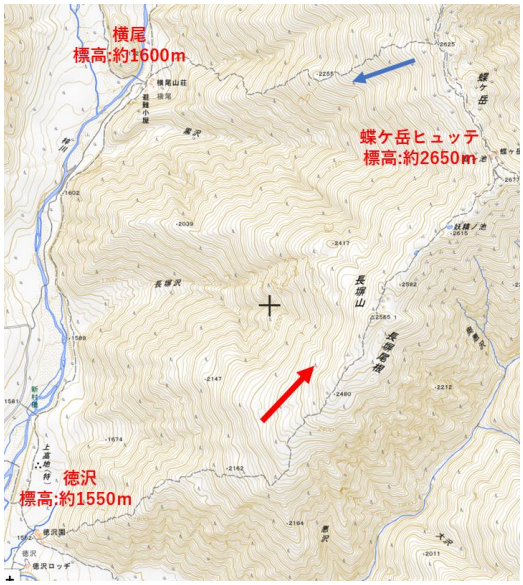
～Mountain Rescue File～　No. 5　　長野県警察山岳遭難救助隊

今年の春の大型連休期間中は過去 10 年間では最多となる 26 件の遭難が発生しました。北アルプスでの残雪に起因する滑落が多発し、2 名の方が亡くなられました。一方で、疲労や道迷い、技量不足等による救助要請も相次ぎ、遭難者は 30 人に上りました。今回は大型連休期間中に北アルプスの蝶ヶ岳で発生した道迷い遭難事例を取り上げ、残雪期登山のリスクや、同行者の技量を含めた適切なルート選択等について考えたいと思います。

○久しぶりの本格的な登山

ともに 50 代のＡさん（男性）Ｂさん（女性）ご夫婦は、今年の大型連休期間中に 2 泊 3 日のテント泊の予定で蝶ヶ岳登山を計画しました。計画は、1 日目に上高地から入山し、徳沢から長塀尾根を登り、蝶ヶ岳ヒュッテでテント泊、翌日はピークを踏んで、横尾へ下山し、横尾でテント泊、3 日目は上高地へ戻り帰宅、という内容でした。

Ａさんは、若い頃は冬の白馬岳や穂高連峰の縦走の経験もあり、体力も十分でしたが、Ｂさんは、登山経験も浅く、年に数回程度の夏山登山の経験があるだけで、残雪の残る北アルプス登山は今回が初めてでした。事前に山小屋等に問い合せ、二人とも雪に備えてチェーンスパイクを揃え、B さんはザックや登山靴を新調し今回の登山に臨んだそうです。



蝶ヶ岳一帯の地形

初日に二人が登った長塀尾根は、危険箇所こそありませんが、標高差は約 1000ｍある上、この時期は残雪により足場が悪いため、相応の体力が求められるルートです。テントなどの幕営装備は体力に余裕のあるＡさんが持ち、Ｂさんは衣類など軽めの装備を持って行動しましたが、雪山の経験のないＢさんはコース上の残雪に足をとられ、途中からバテバテとなってしまったそうです。それでもコースタイムから 3 時間遅れたものの予定していた蝶が岳ヒュッテに到着し、テントで宿泊をしました。

○ルートを外れ雪の残る沢へ…

翌日は、眺望の良い「蝶槍」を往復後、午前 10 時頃、前日登ってきた長塀尾根ではなく、横尾へ向けて下山を開始しました。このコースは、上高地側から蝶ケ岳に登るもう一つのルートですが、稜線付近に顕著な地形上の特徴がないため、特に残雪期は的確なルートファインディングが求められるコースです。また、当然ですが雪上歩行の経験と技術も必要になるルートです。

下山を始めて間もなくして雪の残る樹林帯を進むうちにトレースが不明瞭になり、Ａさんは、いつしか登山道を外れていることに気がつきました。地図アプリで現在地を確認すると正

規のルートからそれほど離れていなかったため復帰を試みましたが、雪上の歩行に不慣れなＢさんの技量を考えると、思うように行動できなかったそうです。

Ａさんによれば「妻の歩きやすい方向に進むしかなかった。妻に体力的に余裕がなく登り返すことは考えられなかった」とのことでしたが、結果的にはこの判断が裏目に出てしまい、そのまま下山を続けると斜面はさらに急になり、急な雪渓に迷い込んでしまいました。前日の長塀尾根にも雪はあったものの、傾斜もなだらかだったためチェーンスパイクとストックで対応できましたが、迷い込んだ沢ではチェーンスパイクでは滑落の危険性が高く、特に登山経験の少ないＢさんは雪を踏み抜いて小さな滑落や転倒を繰り返すようになってしまいました。

遭難現場の位置

行動も長引き、午後５時を過ぎたころ、日没を前にＡさんはやむなく横尾山荘に電話をして救助を要請することにしました。

○深夜までかかった救助活動

横尾山荘には県警の救助隊員が常駐しており、Ａさんから通報を受けた隊員は、詳細な位置を把握するためにＡさんに 110 番通報をするように指示をしました。得られたＧＰＳ情報により概ねの位置が特定され、現場は登山道の北側の沢の中で等高線の間隔が狭く斜度の急な場所であることが伺えました。

既に５時を過ぎていましたが、急な雪渓で身動きが取れないという状況から、横尾山荘に常駐していた県警隊員２名と現場一帯の地理に精通し、北アルプス南部地区山岳遭難防止対策協会救助隊隊長でもある横尾山荘の山田直さんら２名、計４名が出動し、対応に当たることとしました。

標高 2000ｍ付近まで登山道を登り上げた後、現場に向けて斜面をトラバース（横移動）してＡさんらと接触を試みることとしました。笹藪と苔の急斜面を横切り雪渓に降り立つ頃には日没を迎え、用意したメガホンで呼びかけると沢の上部から返事が聞こえました。ＧＰＳ情報があるとはいえ、足場の悪い複雑な山間地において、暗闇の中、ピンポイントでその場所にたどり着くことは簡単ではありません。さらに雪渓を 100ｍほど登り詰めると、ようやくＡさん達のヘッドライトの明かりが見え、午後８時１分に二人と無事合流することができました。Ｂさんはこの時の心境を「ほっとした。しかし、こんな急な斜面からどうやって助けてもらえるのか不安になった」と振り返っています。

暗闇の中、雪渓を登り返す

ＡさんＢさんともに怪我もなく自力歩行にも問題はありませんでしたが、二人を安全に登山道に戻すため、ロープで確保しながら雪渓を 150ｍほど登り返し、その後も滑落防止用のロープを張り込み、安全を確保しながら急斜面を横切って、約２時間かけて登山道に戻りました。

Ｂさんを背負って搬送

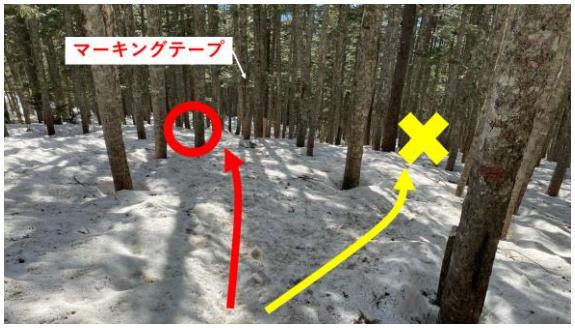
登山道に戻ってからは、後は横尾に向けて下山するだけでしたが、ここにきて長時間行動の影響かＢさんのペースが急激に低下し、最終的には介助無しでは立つことも困難になってしまいました。Ｂさんによると「前日はよく眠れず、睡眠時間は１時間程度だった」ようです。途中から救助隊員がＢさんを背負って搬送し、日付の変わった午前１時８分に横尾に到着し、救助を完了しました。

○現場を検証をしてみると

翌日にはＢさんも回復し、二人は上高地へと下山をしましたが、引き続き隊員が横尾に常駐をしていると、他の登山者からＡさんらと同じように蝶ヶ岳から下山中に沢に迷い込み何とか登山道に戻ってきたという話があり、今回の現場となった登山道をパトロールを兼ねて確認することとしました。

稜線まで登り詰めると日当たりの良い稜線一帯は、雪解けが進み登山道も明瞭でしたが、稜線から標高が下がった樹林帯の登山道は残雪に覆われていました。

注意して歩いていると標高 2500ｍ付近では正規の登山道を辿るトレースとは別に今回の遭難現場となった沢の方向に続いているトレース（黄色矢印）を確認しました。今回遭難したＡさん達が同じ場所で道に迷ったかどうかは定かではありませんが、「トレースが不明瞭になった」と振り返っていることや、時間的な状況から、Ａさん達もおそらくこの付近で登山道を外れて沢に迷い込んでいったのではないかと推測されました。



確認された二つのトレース

画像ではわかりにくいのですが、正しい方向（赤矢印）には立木にマーキングテープが巻かれており、地図等で方向を確認していれば迷い込むことはないかもしれませんが、一帯は地形的な特徴も少なく、濃い樹林帯で眺望も得られないため、漫然とトレース辿っていれば迷い込んでしまう可能性が非常に高い場所でした。

残雪期は今回の現場のように登山道が雪に覆われている場合が多く、先行者のトレースが必

ずしも正しいとは限りません。

事前に地図等でルート全体の地理概念を把握し、迷いやすい場所ではこまめに立ち止まって確認をする習慣を身につけましょう。

また、今回の事例でもわかるとおり、万が一ルートから外れていることに気がついた場合は直ちに行動を止めて時間が掛かっても登り返すのが鉄則です。A さんは「ルートから外れたにも関わらず下山するのは危険な行為だということがよくわかった」と振り返っていますが、本来のルートを外れて下山を強行した結果、崖や急な沢に迷い込み滑落するといったケースはこれまでも数多く発生しています。今回、最悪のケースに発展する前に通報を決断したことは不幸中の幸いでした。

〇遭難の間接的な要因は…

今回の遭難の直接的な要因は残雪に起因する道迷いですが、間接的には「当事者間の体力・技術の差」にも要因があります。A さんは救助要請の際、「自分だけなら大丈夫だった…」と振り返っていますが、A さんと B さんとの間には、明らかな体力と技術の差があるにも関わらず、夫婦といえども引率的立場にある A さんがその評価を誤ったことも今回の遭難を招いた要因の一つと言えるでしょう。

今回のようなケースはこれまでも度々発生していますが、パーティ登山においては、全体の計画から当日の行動も基準を体力や経験値で劣る人に置くのが大原則です。雪山登山の経験のない B さんを連れて、標高差 1000m の残雪混じりの今回のルートを歩き通すのは、実際の行動時間にも余裕がなく、客観的に見てもやや無理があったと言えるでしょう。

〇終わりに

蝶ヶ岳は北アルプスの中では入門的な山として紹介されますが、山の難易度は季節や残雪状況によって大きく左右されます。蝶ヶ岳に関して言えば、この時期は上高地側では今回のような道迷い遭難が多く、安曇野側の三股登山口へ下山するルートでは滑落による遭難が多発するなど、決して初心者向けの山とは言えません。

遭難したお二人も今回の登山を「認識の甘さ、リサーチ不足」と振り返っているように、認識不足やちょっとした判断ミスが、深刻な遭難に発展してしまうことがあります。

安全登山の基本は「自分も遭難するかもしれない」という意識を持つことです。意識をすれば事前の準備や持って行く装備の選択も変わってくるはずです。また、登山に向けて日々の過ごし方も自ずと変わるのではないかと思います。

今回の事例を教訓に、皆さんもリスクに対する意識を高め、安全登山の実践に努めていただきたいと思います。

（終）